

# 小学校国語科「書くこと」の意欲を高める

## 手立ての継続的な実施の効果

－ 1人の児童の半年間の記録－

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 初等教科教育分野 宮本 聖子

### 1. 研究の背景から研究方法までの概要

#### 1-1. 研究の背景

学校現場において、児童が「書くこと」を求められる場面は多い。国語科の作文や感想文にとどまらず、他教科における記述式の学習課題、振り返りカードや学習記録など、日常的に書く活動が位置づけられている。小野田(2012)は、「文章を書く能力は、学校生活のみならず社会生活でも重要になる能力であり、学校教育を通して育成が期待される能力の一つである。」と述べている。しかし、実際の指導場面においては、書くことに苦手意識をもつ児童が多く、文章を書くことそのものに困難を感じる実態が見受けられる。では、一体、小学生の「書くこと」の実態はどのようなものか。平成17年に国立教育政策研究所が実施した「特定の課題に関する調査」の質問紙調査において、「文章を書く学習が好きだ」に対して、肯定的回答の児童の割合は、第6学年で37.4%と低いことが分かる。(表1)

表1 国立教育政策研究所「特定の課題に関する調査」より

設問3	<第6学年> (%)	
	肯定的回答	否定的回答
(1) 文章を書く学習が好きだ。	37.4	59.7
(2) 文章を書くことは、日常生活の中で必要だ。	78.3	17.8
(3) 文章を書く学習は、ほかの教科や総合的な学習の時間などの学習に役立つ。	81.0	14.0
(4) 文章を書くとき、書こうとする内容はすぐ決まる。	47.1	46.5
(5) 文章を書くとき、いろいろ調べて材料を集めるようにしている。	46.6	48.0
(6) 文章を書くとき、段落に分けて書くように気をつけている。	62.2	34.1
(7) 文章を書くとき、読み手に分かりやすい文章にしようと工夫している。	60.6	33.3
(8) 書いた文章を読み返して書き直すようにしている。	73.0	24.5
(9) ふだんの生活の中で、手紙や日記などを書くようにしている。	46.8	50.4

また、平成29年度実施の全国学力・学習状況調査の質問紙調査の「400字詰め原稿用紙2~3枚の感想文や説明文を書くことは難しい」という質問に対して「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した小学6年生は、合計で

59.3%であった。さらに、令和6年度の全国学力・学習状況調査では、「書くこと」について、目的や意図に応じて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかをみる問題を出题された。結果を受け、国立教育政策研究所は、小学校国語の「書くこと」の課題として、「事実と感想、意見との区別が明確でないなど、自分の考えを伝えるための書き表し方の工夫に課題が見られた。」「自分の考えなどを記述していても、必要な情報を取り出すことや表現の効果を考えることに課題が見られた。」と指摘している。以上のような様々なデータから、「書くこと」の意欲や技能において多くの課題があることが分かる。

#### 1-2. 昨年度の実践より

昨年度、筆者は、児童が「書くこと」の意欲を高めるためにどうすればいいのかについて考えた。鹿毛(2022)は、認知的評価理論を用いて、環境(外的事象)の性質が、自己決定の感覚が高まる「自律性支援的」であれば、有能感や自律性の感覚も高まり、よって内発的動機付けも高まるとしている。(図1)

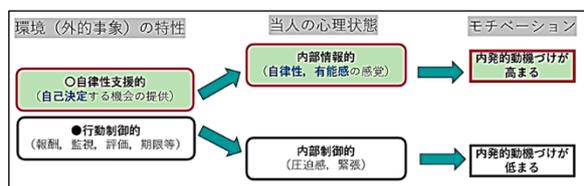


図1 鹿毛(2022)をもとに筆者加筆

そこで、児童の自律性や有能感を高められるような授業の手立てによって、児童の「書くこと」の意欲が高まるのかを検証することとした。Y県内公立小学校の5年生の児童を対象に、自律性や有能感を高める手立てを考え、授業実践を

行った。自律性を高める手立てとして、子どもが自分の好きなことやものを書くといった、題材を設定した。有能感を高める手立てとして、書き方を練習させる、書くための言葉を提示する、考えを整理できるようなワークシートや付箋を使う、といった手立てを講じた。結果、児童は「書きたい」という意欲と「書けそうだ」という自信を持って書き進めることができた。自律性を高める手立てと有能感を高める手立てそれぞれが、児童の意欲向上に関して有効であることが明らかになったと考える。一方、昨年度の研究では、意欲の継続や「書くこと」の習慣化という点についてまで検討することはできなかった。

### 1-3. 研究の目的

小野田 (2012) は、「何かの行事が行われるごとに単発的に作文に取り組ませるのではなく、作文に取り組む時間を継続的に設け、作文活動を習慣化させることが、書く能力の育成には必要である。」と述べている。したがって、児童の自律性・有能感を高めながら、「書くこと」の習慣化を行うことで、さらに「書くこと」の意欲・能力の向上へ繋がるのではないかと考えた。

よって本研究では、個に応じて自律性や有能感をさらに高める手立てを継続的に行ってその効果を分析し、児童の「書くこと」の意欲や能力向上への効果的な手立てを明らかにすることを目的とする。「個に応じた」とした理由は、今回、筆者が実習を行う Y 県内公立小学校の学級の児童が 1 名であったためである。

### 1-4. 研究の方法

対象児童：Y 県内公立小学校第 6 学年 1 名

期間：2025 年 5 月～11 月

#### 研究方法

- ①児童に「書く内容」や「5つの言語意識」について捉えさせ、単元計画や本時の学習に位置づけて指導していく。(自律性)
- ②朝学習等の時間を利用し、専用のワークシートを用いて日常的に書き方の練習に取り組む。ワークシートに応じたミニ作文などを書いたり、チェックシートで自己評価を行ったりす

る。(有能感)

- ③実践前と後に、対象児童へのインタビューや質問紙調査を行う。意欲や技能について、作品や児童の振り返り、ワークシート、児童の取り組みの様子から検討する。

## 2. 研究の手立て

### 2-1. 自律性を高める手立て

自律性を高めるための手立てには、「自分で決める」ということが必要である。昨年度、手立てとして、自分の好きなことやものを書くといった、題材を設定した。今年度は、「自分で決める」ことを更に広げることを考えた。小森 (1999) は、「国語の力を『生きる力』へ高めるには、子供たち (=学習者) の「言語意識」が楽しく深まるような「場面と時間」を、「本時の学習指導演」はじめ、国語科の学習指導計画に具体的に位置づけることが大切である。」としている。(表 2)。

表 2 小森 (1999) をもとに筆者加筆

5つの言語意識
①相手意識
②(①を受けた)目的意識
③(①～②を受けた)場面や状況意識(時間意識等も含む)
④(①～③を受けた)意図的・計画的な表現や理解の方法や技能の意識(又は、既習の学習内容や方法を活動する意識等を含む)
⑤(①～④を受けた)自分の言葉で自覚的・計画的に表現しているか、相手の考えを的確に理解する言語行為になっているかを自己評価する評価意識

本研究では、「5つの言語意識」を「書くこと」の学習に取り入れることとした。「書くこと」の学習計画に、子ども自身が、相手や目的など、「5つの言語意識」それぞれを自分で決めていくようにし、自律性を高める手立てとして位置付けていくこととした。

### 2-2. 有能感を高める手立て

書くためには、児童が「書く技能」も身に付けることも大切なことである。香月 (2020) は「書く技能もまた、書くことへの見通しを持たせ、書けた！という実感をもたらし、書く意欲を育てていくのである。」と述べている。昨年度、曾根朋之、茅野政徳 (2022) による『「まったく書けない」子の苦手を克服！教室で使えるカクトレ高学年』のワークシートを使用した。「カクトレ」は、短時間で反復的に取り組むことを目的とし

たワークシート教材である。これを隙間時間などに取り組みさせることで、児童は「書くこと」の基本的事項を身に付けることができた。だが、昨年度は、回数が限られており、継続的な取り組みはできなかった。そこで、今年度は対象児童に対し、半年間継続的に取り組みを行うこととした。具体的には、朝学習時間等を利用し、短い時間で「書くこと」に慣れさせていくようにした。また、チェックシートを使って、自己評価をできるようにした。「カクトレ」で学んだポイントをいつでも振り返ることができるように掲示した。

### 3. 授業実践

#### 3-1. 実践1

- (1) 実施日時：令和7年6月11日（水）  
～6月17日（火）
- (2) 単元名：たのしみは（光村図書出版6年国語創造）
- (3) 言語活動：日常の楽しみを短歌にして表す。
- (4) 単元指導計画

次	時	学習活動
第1次	1	・書く内容と言語意識を設定する。 ・学習計画を立てる。 ・短歌にしたい場面を決める。
		・「たのしみは」で始まる短歌をつくる。
第2次	3	・作った短歌を見直し、表現を工夫する。
第3次	4	・作った短歌を発表する。 ・学習を振り返る。

#### (5) 主な実践内容

##### ①第1時（書く内容と「5つの言語意識」を設定する。）

1時で、短歌を作成していくことと「5つの言語意識」について説明した。その後、「書く内容」と「5つの言語意識」を考えさせ、ワークシートに記入させた。（図2）

図2 1時で使用したワークシート

##### ②第3時（作った短歌を見直し、表現を工夫する。）

3時では、設定した相手意識を基に、伝えたい内容がより伝わる表現になるよう言葉を吟味する活動を行った。児童は、聞き手の立場を意識しながら語句の置き換えや表現の工夫を行った。

（表3）

表3 3時における児童の発言の一部

・「水てき」より「水玉」の方が、水てきの丸い感じが伝わるかも。  
・「ゆう勝した日にお風呂場で」を「巨人ゆう勝した夜に」に変える。「巨人」という言葉を入れたほうが、阪神ファンの〇〇先生に自分の巨人愛が伝わると思う。

その後、1時で相手意識で設定した教員に来ていただき、完成した短歌を発表する場を設けた。

#### 3-2. 実践2

- (1) 実施日時：令和7年6月18日（水）  
～7月2日（水）
- (2) 単元名：デジタル機器と私たち（光村図書出版6年国語創造）
- (3) 言語活動：考えたことや伝えたいことを基に提案する文章を書く。

#### (4) 単元指導計画

次	時	学習活動
1	1	・書く内容と言語意識を設定する。 ・学習計画を立てる。
2	2	・テーマを決める。
	3	・テーマに関する情報を集める。
	4	・集めた情報を整理して、提案内容を考える。
	5	・提案する文章の構成を考える。
	6	・提案する文章の構成を見直し、下書きを書く。
	7	・下書きを見直し、文章を清書する。
3	8	・読む人に楽しく納得してもらえるように工夫をする。
	9	・完成した提案する文章を発表する。 ・学習を振り返る。

#### (5) 主な実践内容

##### ①第1時（書く内容と「5つの言語意識」を設定する。）

今回の実践においても、前回と同様に「書く内容」と「5つの言語意識」を児童に決めさせるようにした。（図3）

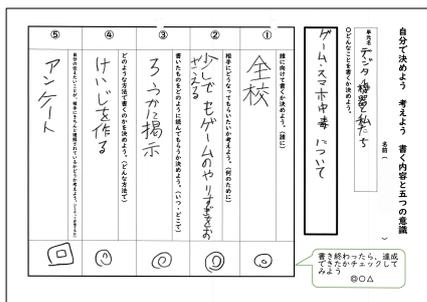


図3 1時で使用したワークシート

児童は書く内容を決める際、「全校のみんながよくゲームの話ばかりしているの、やり過ぎはよくないと提案する文章を書く。」と発言していた。また、相手意識に設定した全校の児童が実際どれくらいゲームをしているのかを知ってから、内容を決めていくようにしたい、という考えも話していた。児童は、自ら Google フォームでアンケート作成し、全校に回答してもらうように呼び掛けていた。(図4) アンケート結果から、「課金をしている人が多いから、課金のことを入れるように調べた方がいい。」と発言していた。集めた情報をもとに、構成や内容を考えていた。

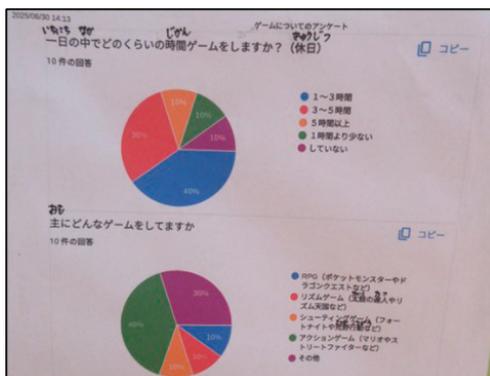


図4 全校にアンケートを取った結果

### 3-3. 実践3

- (1) 実施日時：令和7年10月10日(金) ~10月29日(水)
- (2) 単元名：『鳥獣戯画』を読む・『推し』を紹介しよう(光村図書出版6年国語創造)
- (3) 言語活動：自分の「推し」を紹介する文章を書く。
- (4) 単元指導計画：平成23年度 佐賀県教育センタープロジェクト研究小学校国語科教育研究委員会(2011)『名画のよさを伝える解説文を書こう「鳥獣戯画を読む」指導案』を参考に、単元指導計画を設定した。

次	時	学習活動
1	1	・書く内容と「5つの言語意識」を設定する。 ・単元のためてを知り、学習計画を立てる。
	2	・絵と文を照らし合わせながら、筆者のものの見方を捉える。
	3	・筆者の評価する言葉を読み取る。
	4	・筆者の表現や構成の工夫について読み取る。
	5	・絵を見て、自分で絵を評価する。
	6	・筆者のものの見方やそれを伝えるための工夫についてまとめる。
2	7	・『『推し』を紹介しよう』の学習の見通しをもつ。
	8	・題材について情報を集める。
	9・10	・文章の構成や表現の工夫を考え、「推し」を紹介する文章を書く。
3	11	・書いた文章を発表し、感想を聞いて学習を振り返る。

#### (5) 主な実践内容

##### ①第1時(書く内容と「5つの言語意識」を設定する。)

今回の実践においても、前回と同様に「書く内容」と「5つの言語意識」を児童に決めさせるようにした。(図5)

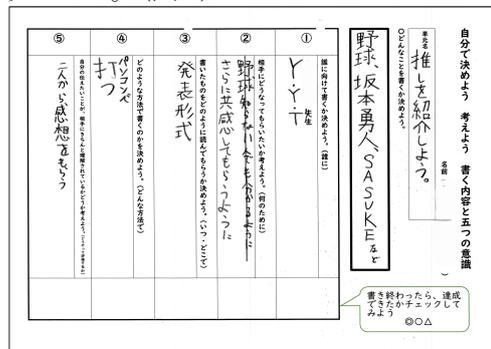


図5 1時で使用したワークシート

今回の実践は、「読むこと」と「書くこと」を関連付け、筆者の考え方や言葉の工夫を生かして紹介文を書く力の育成をねらいとした。児童には、「読むこと」で学んだことをいかして、その後「推し」を紹介する紹介文を書くことを説明した。「推し」を題材としたのは、昨年度の実践において、自律性を高める手立てとして有効であり、児童が意欲的に取り組めることが確認されていたためである。

児童は自身が紹介したいものを思い浮かべながら「書く内容」を考え、読み手に一緒に共感し

てもらえるように目的意識を「野球を知らない人」から「野球をある程度知っている人」に変更する姿も見られた。このように、「5つの言語意識」は最初に設定するが、途中、児童の思いや考えによって変更しながら実践を行った。

②第3時（筆者の評価する言葉を読み取る。）

第3時では、児童の語彙の少なさという課題を踏まえ、筆者が用いている評価を表す言葉に着目した。『鳥獣戯画を読む』の表現を整理し、併せて教科書掲載の「言葉の宝箱」を参考に、紹介文に活用できそうな語句を児童と共に選定した。（図6）整理した語彙は一覧にして教室に掲示し、その後の表現活動に生かせるようにした。



図6 「言葉の宝箱」を参考にした一覧表

9・10時では、構成を考えながら紹介文を作成した。「読むこと」で学んだ表現や「言葉の宝箱」を生かして言葉を選んでいった。（図7）

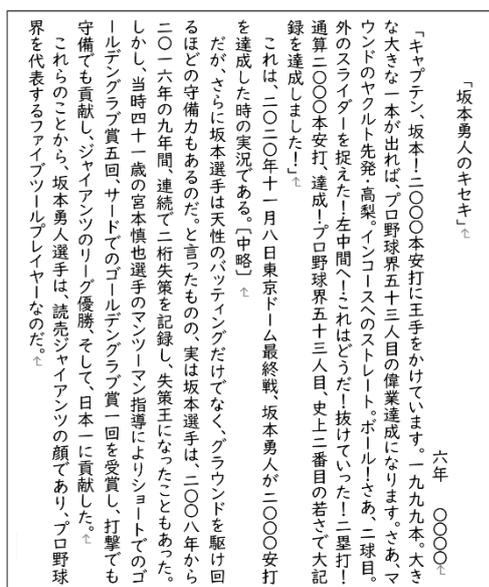


図7 児童が作成した紹介文の一部

3-4. 実践4

(1) 実施日時：令和7年11月4日（火）  
～11月25日（火）

(2) 単元名：「おすすめパンフレットをつくろう」  
（光村図書出版 6年国語創造）

(3) 言語活動：推薦したいものをパンフレットにまとめる。

(4) 単元指導計画

次	時	学習活動
1	1	・学校のパンフレットを作成するという学習の見通しをもち学習計画を立てる。 ・「5つの言語意識」の一部設定する。
2	2	・推薦したいものを決めて、情報の収集を行う。
	3	・教科書の例文を読み、推薦する文章の特徴を確かめる。 ・「推敲チェックシート」を基に、教科書の例文や教師の例文を推敲する。
	4	・伝えたいことを意識しながら、集めた情報を基に、パンフレットの構成を考える。 ・ページの割り付けと推薦する文章の構成を考える。
	5	・図表などを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方などを工夫しながら、推薦する文章を書く。
	6	・書いた推薦文の下書きをよりよい文章のために推敲する。（自己評価・他者評価）
3	7	・推薦文を修正し、パンフレットの清書をする。
	8	・完成したパンフレットを読み、学習を振り返る。
後日		・パンフレットを新入生保護者説明会で配付し、保護者に読んでもらう。

(5) 主な実践内容

①第1時（書く内容と「5つの言語意識」を設定する。）

これまで、1時に「書く内容」と「5つの言語意識」を児童自身に決めさせてきた。今回は、学習の必然性を高めるため、校長先生に依頼する形でパンフレット作成の設定を行い、活動の一部変更した。その結果①相手意識と③場面・状況意識は既に定まり、児童には②目的意識、④方法意識、⑤評価意識を決めさせた。（表4）

表4 1時で設定した「5つの言語意識」

言語意識	設定
①相手意識 <sup>①</sup>	新1年生の保護者 <sup>②</sup>
②目的意識 <sup>③</sup>	安心してOO小へ通わせてほしい。 <sup>④</sup>
③場面・状況意識 <sup>⑤</sup>	2月の新入生保護者説明会で、パンフレットを配付する。 <sup>⑥</sup>
④方法意識 <sup>⑦</sup>	打つ（パソコンで） <sup>⑧</sup>
⑤評価意識 <sup>⑨</sup>	QRコードをパンフレットにのせて、感想を聞く。 <sup>⑩</sup>

児童は、目的意識を「保護者に安心してお子さんを〇〇小へ通わせて欲しい。」と発言して、設定した。ここで設定した意識をその後の授業において常に確認し、意識づけしながら授業を行っていくようにした。

②第7時（書いた推薦文の下書きをよりよい文章にするために推敲する。）

作成するパンフレットが読み手に意図の伝わる内容になっているかを確認するため、書き手が読み手の立場に立って推敲することが重要である。学級の児童は1名であるため、相互推敲の相手として校長先生と他校の6年生児童に依頼した。その際、「小学校国語6年創造」P192「書き表し方を工夫するときは」を参考に作成した「推薦文推敲チェックシート」を用いて推敲を行った。（図8）

図8 相互推敲で使用した「推敲チェックシート」

児童は、他校の児童と校長先生の推敲と自分の推敲を比べながら、下書きをどう修正していくか考え、文章を修正した。文章が推敲後にどのように変化したかを示す。（図9）

<p><b>【推敲前】</b></p> <p>A 小を象徴する伝統活動。それは、器楽活動です。50年以上の伝統を持つ吹奏楽活動に変わり、令和5年から全校で取り組んでいるものです。</p> <p>器楽活動では、保護者の方々に「最響」の音色を届けるため、日々練習に励んでいます。学期に1回程度、発表もしています。</p> <p>お子さんが周りについていけない不安をお持ちかもしれませんが、大丈夫です。上級生や先生方が遅れてしまわないように、一人一人に合わせて優しく教えてくれます。</p>	<p><b>【推敲後】</b></p> <p>A 小を象徴する伝統活動。それは、器楽活動です。50年以上の伝統を持つ吹奏楽活動に変わり、令和5年から全校で取り組んでいます。</p> <p>器楽活動では、保護者の方々に「最響」の音色を届けるため、日々練習に励んでいます。使う楽器は、鍵盤ハーモニカやグロッケン、小太鼓など色々あります。A 町のお祭りや、音楽学習発表会、ありがとうコンサートなど、学期に1回程度発表をしています。</p> <p>お子さんが活動についていけない不安をお持ちかもしれませんが、大丈夫です。上級生や先生方が遅れてしまわないように、一人一人に合わせて優しく教えてくれます。</p>
--	--

図9 児童が作成した推薦文(推敲前・後)

3-5. 実践5

(1) 日常の取り組みについて

朝の学習の時間を利用し、曾根朋之、茅野政徳(2022)『「まったく書けない」子の苦手を克服！教室で使えるカクトレ高学年』を使用したワークシート演習を行った。教師がポイントを説明し、児童がプリントで学習した。学習後は、チェックシートで振り返りを行った。「カクトレ」で学習したポイントを教室に掲示して、いつでも見られるようにした。児童が書いたチェックシートの振り返りの一部を以下に示す。（表5）

表5 児童のチェックシートの振り返り（一部）

主題と主題のねじれ	ねじれていると、こんなに変わるんだな、と思った。
一文の長さ	分けるだけじゃなくて、つなぎ言葉も使わなきゃだめって分かった。
見出し・題名	みんなが興味を持つような工夫をしたい。
書き出し	じっさいに書くときに、よく使えそう。
つなぎ言葉	今までより、よく分かるようになった。今もけっこう使っている。
考えと事実	「思う」という言葉以外の文末表現を使っていきたい。
常体と敬体	常体と敬体を意識しながら、すいこうができました。
和語と漢語	どんな人でも分かるような使い分けをしていきたい。
表現の工夫	日記を書くときにも、このことを生かして書きたい。
図や表の使い方	ちゃんと使い分けて、伝わりやすい資料を作りたい。

4. 分析・検証

4-1. 質問紙分析

対象児童に対し、授業実践の前後に「書くこと」に対する質問紙調査を行った。

「書くことの意欲の変化」の結果は、表6の通りである。

表6 書くことの意欲の変化(事前・事後)

質問項目	回答〔事前〕(4件法)	回答〔事後〕(4件法)
文章を書くことは好きですか。嫌いですか。	「どちらかと言えば好き」と「どちらかと言えば嫌い」の間に丸をつけた。 〔理由〕 ・好きなときもあるし、嫌いなときもある。49対51くらいで嫌いがちょっとだけ勝ってるかも。	「どちらかと言えば好き」と「どちらかと言えば嫌い」の間に丸をつけた。 〔理由〕 ・手書きは、自分から書こうとはあまり思わない。タブレットで打って作るのは楽しい。

授業実践後、回答で丸をつける場所は変わらなかった。しかし、「文章をタブレットで打って作成するのは楽しい」と答えている。

授業実践後の「自律性や有能感を高める手立てについて」の結果は、表7の通りである。

表7 自律性や有能感を高める手立てについて(事後)

	質問項目	回答(4件法・自由記述)
1	「5つの言語意識」を意識しながら書いていましたか?	まあまあ意識した
2	「カクトレ」で練習を積み重ねてきました。「書くこと」に役立ちましたか?	役立った
3	「5つの言語意識」を決めて書いたり、「カクトレ」で練習したりしたことで、文章を書くことに対して変化はありましたか?	ある。反ろん想定法や接続語はこれからも使っていきたい。

自律性や有能感を高める手立ては、児童が意識し、「書くこと」に有益だったと考えている様子が分かる。また、学んだことを今後も使っていきたい、という意欲が見られた。

授業実践後の「書くことの気持ちの変化」の結果は、表8の通りである。

表8 書くことの気持ちの変化(事前・事後)

	質問項目	回答〔事前〕 (自由記述)	回答〔事後〕 (自由記述)
1	文を書くときに、困ることや嫌なことはありますか。	長く書くのが面倒くさい。書き出しが分からない。 (理由) 読書感想文みたいに、長いのは嫌い。書き出しも最初、どうやって書けばいいか分からなくて、それで時間がかかると嫌になるような気がする。	手書きはいやだ。 (理由) 手書きはいやだけど、書き方とか言葉の選び方とかはできるようになった。
2	もっと文章を書くことが楽しくなると思うことや、こんな文章なら書きたいと思うことを教えてください。	自分のしゅみについての文章。 (理由) やっぱり、野球とか。自分の興味があるものなら、まだ書きやすい。それならやる気は出るような気はする。自分の好きなことなら、誰かに読んでもらいたい。	反ろん想定文とかクイズ (理由) 反ろん想定は書きが分かったから。イズは楽しいから。

事前で児童が抱えていた「どう書いたらいいか」という困難さは、事後に無くなっていることが分かる。また、事後の記述からは、学んだことをいかしたい、という意欲も見られた。

#### 4-2. 検証作文の分析

対象児童に、計3回作文を書いてもらい、作文の能力の変化について検証を行った。ここでは、1回目と3回目の作文を比較して検証する。

##### 〔1回目〕

- (1) 実施日時：令和7年5月23日(金)
- (2) テーマ：陸上記録会について

ぼくは最後の記録会で自己ベストを出せてうれしかったです。ソフトボール投げでは、体育の時に〇〇先生に教えてもらったひじを上げて高く投げるといった工夫をおねに37mから38mと記録をのばせて良かったです。100m走では〇〇先生に教えてもらったクラウチングスタートで良いスタートを切れて後は体力で19秒、18秒と数秒短くできてうれしかったです。これから、プロ野球選手になるためにも、さらに努力していきたいです。

図10 児童作品(1回目)

##### 〔3回目〕

- (1) 実施日時：令和7年11月27日(木)
- (2) テーマ：音楽コンサートについて

「おかわり団がA町に伝えてくれたこと」  
六年 〇〇〇〇  
(ドキドキ：ワクワクやとおかわり団の演奏が聞けるぞー)  
一年越しの音楽コンサートに僕は心が躍った。おかわり団は、A小に毎年来てくれているプロの音楽家たちだ。僕は、一年生の頃、おかわり団の演奏に圧倒された。今年で6回目。今年はどうな演奏を聞けるのか、楽しみにしていた。が、同時に寂しい気持ちもあった。  
〔中略〕  
僕は、中学校に行ったらもう、おかわり団の曲が聞けなくなると思っていた。しかし、今年も中学生もコンサートに参加していたので、来年もまた、演奏が聞けるのではないかと、楽しみにになった。おかわり団は、僕達に音楽の楽しさを全力で伝えてくれる、A町にとっての宝物だ。

図11 児童作品の一部(3回目)

文部科学省(2017)『小学校学習指導要領解説 国語編』[知識及び技能](1)「言葉の特徴や使い方」に基づき作文を検証した。1回目の作文では、一文が長く読点が少ないことや、同じ語彙の多用、段落を意識していない点が見られ、「話し言葉と書き言葉」「語彙」「文や文章」に課題があった。また、推敲の様子は見られなかった。

一方、3回目の作文では、書き出しや題名の工夫、気持ちを表す語彙の使用など表現の工夫が増加し、推敲して文章を見直す姿も確認された。これらのことから、一連の手立てを通して「書くこと」の能力が向上したと考えられる。

## 5. 成果と課題

### 5-1. 成果

研究における成果として、自律性や有能感を高める手立ての継続的な実施が、学習者が意欲を高め、「できる」を実感して、「書くこと」の能力を高めることができた点が挙げられる。児

童自身で「5つの言語意識」などを決めるといった、自律性を高める手立てを学習活動に位置付けていくことで、児童が読み手を意識しながら書くことにつながった。読み手を意識して書くことで、必要感を持たせ、意欲的に「書くこと」に取り組ませることが可能となった。さらに、日常的な書き方の練習や、授業における書き方の工夫の指導などの有能感を高める手立ては、児童の「書くこと」に対する抵抗感を減らすことにつながった。技術の習得には、時間がかかるが、繰り返し行って習慣化させ、意識化を図りながら指導していくことで、児童は「できる」という有能感を持って、「書くこと」ができると考える。自律性や有能感を高める手立ての継続的な実施が、意欲や「書くこと」の能力向上に関係があると分かったことが最大の成果であると考えられる。

## 5-2. 課題

一方で、自律性や有能感を高める手立ての継続的な実施が、児童の意欲の向上にすぐに繋がることは、実証できなかった。児童に「5つの言語意識」を決めさせることで、意欲的に取り組んでいたことは、前述の通りであるが、やはり「書くこと」には、多くの学習過程があり、そこを乗り越える労力が必要で、それが児童の意欲を上げることにはつながらないのではないかと考える。しかし、児童は今回「手書きはいやだが、タブレットで作成するのは楽しい」と答えており、書く媒体が児童の意欲に与える影響も考えられることが分かった。今後は、書く手段についても考えていく必要がある。

また、そもそも「書くこと」の学習には、活動が多く、個人差の開きが大きいことが予想される。今回は、対象児童が1名での研究であった。今後、対象者の人数を増やした場合、意欲を高めるためにどのような手立てが必要かを具体的に考えていく必要もあるだろう。汎用性を考え、どの学級においても、「書くこと」の意欲向上を実現するための指導の在り方について、引き続き検討を進める必要があると考える。

## 参考・引用文献

- ・ 小野田亮介 (2012) 「初等教育において習慣化可能な作文課題および実施方法の検討

- リレー作文を利用して-」『教育心理学研究 第60巻 第4号』 pp.402-415
- ・ 鹿毛雅治 (2022) 『モチベーションの心理学』 中公新書 pp.205-210
- ・ 国立教育政策研究所 (2006) 『特定の課題に関する調査 (国語) 調査結果 (小学校・中学校)』 Retrieved from <https://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokutei/index.htm> (accessed 2025.5.23)
- ・ 国立教育政策研究所 (2017) 『平成29年度全国学力・学習状況調査 調査結果資料【全国版/小学校】』 Retrieved from <https://warp.ndl.go.jp/web/20250801174550/https://www.nier.go.jp/17chousakekkahoukoku/factsheet/17primary/> (accessed 2025.12.30)
- ・ 国立教育政策研究所 (2024) 『令和6年度全国学力・学習状況調査の結果 (概要)』 Retrieved from <https://www.nier.go.jp/24chousakekkahoukoku/index.html> (accessed 2025.12.30)
- ・ 小森茂 (1999) 『生きる力を育てる国語科・伝え合う力を高める感想交流学习』 国土社 pp.7-9
- ・ 白坂洋一・香月正登 (2020) 『子どもの論理で創る国語の授業 -書くこと-』 明治図書 pp.16-21
- ・ 曾根朋之, 茅野政徳 (2022) 『「まったく書けない」子の苦手を克服! 教室で使えるカクトレ高学年』 東洋館出版社
- ・ 平成23年度 佐賀県教育センタープロジェクト研究小学校国語科教育研究委 (2011) 『名画のよさを伝える解説文を書こう「鳥獣戯画を読む」指導案』 Retrieved from [https://www.saga-ed.jp/kenkyu/kenkyu\\_chousa/h24/01%20sho\\_kokugo/chojugiga.htm](https://www.saga-ed.jp/kenkyu/kenkyu_chousa/h24/01%20sho_kokugo/chojugiga.htm) (accessed 2025.8.30)
- ・ 光村図書出版 (2024) 『小学校国語学習指導書6創造 (上) (下)』
- ・ 光村図書出版 (2024) 『小学校国語 2年～6年』
- ・ 文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領〈平成29年告示〉解説 国語編』 東洋館出版社